ポラリス

札幌社会保険総合病院　院外広報誌

第11号
2009年1月

●新年のご挨拶
全国初「敷地内全面禁煙」から10年目
●医療安全推進週間
「わかるまで　聞こう　話そう　伝えよう」
●医療の現場から①②③
●部門紹介　ＭＥ部
●こんにちは、医療連携室です　No.8
●院内図書コーナー「北辰文庫」
●第10回調理技術勉強会が開催されました
●クリスマスの夕べに参加して

ポラリスの由来

ポラリスは北極星を意味します。当院の前身である北辰病院の北辰もまた、ポラリスと同じ北極星を意味する言葉なのです。北極星のように、北国の中心で悠久に燦然と輝き続けたいという願いが込められているのです。
題字は秦院長の直筆です。

URL　http://www. zensharen. or. jp/sapb

新年のご挨拶

全国初「敷地内全面禁煙」から10年目

病院長　秦　　温　信

明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、さわやかな新年を迎えられたことと存じます。当院として昨年さまざまな課題に取り組み、一定の成果をあげることができましたのも、皆様のご支援があったから他なりません。心から感謝申し上げたいと思います。

今年は、2000年元旦より全国に先駆け「敷地内全面禁煙」を実施してから10年目の年に当たります。これまでご支援・ご協力いただきましたことに感謝いたします。

年頭に当たって「敷地内禁煙」の考え方および2000年から実施してきた当院の活動などを振り返り、新年のご挨拶にかえさせていただきたいと思います。

Ⅰ　なぜ「敷地内禁煙」なのか。

病院は喫煙がもたらす健康被害を最も理解しているはずの医療従事者が働く場所であり、医療従事者として健康に及ぼす影響を受診者に理解してもらう意味でも「敷地内禁煙」の立場をとるべきであると考え、実施に踏み切ったものです。すなわち、「敷地内禁煙」は禁煙治療を進めるための、またそれ自体無言の禁煙治療の手段・方法と考えることができます。したがって、病院の館内だけの禁煙で館外に喫煙所を設置するのでは本来の意味が伝わらなくなってしまうというものです。その意味でも病院の全面禁煙が社会全体の禁煙推進のための最も有効な方法との考え方が今では一般的になってきています。

Ⅱ　「敷地内全面禁煙」活動のこれまで

当院の「禁煙推進委員会」として継続している活動について述べたいと思います。「敷地内禁煙」の実施後まず「入院案内」に全面禁煙となったことを記載し、いわゆる「禁煙パトロール」をはじめましたが、これは今でも日に3回程度巡回し吸い殻の収拾や禁煙指導を行っています。毎年世界禁煙デーを中心とした週間を「禁煙週間」とし、「世界の禁煙ポスター展」などを行っています。また、禁煙に対する苦情や禁煙については、看護科長が毎日交代で行っている「診療相談・看護相談」でも「禁煙相談」として応じています。当院における「禁煙外来」受診数は保険収載によって2006年以降急激に増加しています。さらに、入院された喫煙者に対しては入院予約のオリエンテーション時から禁煙についての相談・支援を行い、退院後も外来で支援を行う体制をとっています。また、2006年3月より市内タクシー協会の協力もえて当院での乗客待ちタクシーは禁煙車のみとしましたが、昨年7月からの札幌圏内タクシーの全面禁煙化につながったと思っております。

Ⅲ　これからの活動―第4回日本禁煙学会について

今年の9月12－13日当院が担当して日本禁煙学会学術総会がシェラトンホテル札幌で行われます。ホテル総支配人ほか関係者のご協力により会期中はホテル内は全客室も含め全館禁煙になることになっております。折しも今年は厚別区の開基20周年という記念すべき年に当たっており、区全体で記念行事が行われる予定ですが、この学会もその行事の一環として加わることになりそうです。会期中だけでも新札幌エリアの禁煙化ができないか模索中で、区長はじめ多くの方々が実現に向けて検討してくださっております。

米国で初の黒人大統領が間もなく誕生しますが、そのオバマ氏の選挙演説の中で何度も連呼する「change!」そして「yes we can」という短い言葉に民衆が呼応する場面をテレビでご覧になった方も多いと思います。今年こそ何か素晴らしい変化が起こることを皆さんと共に期待したいと思います。今年も道央圏唯一の地域支援病院としてさらに質が高くかつ安全な医療圏を目指し、職員が一体となって全力を注いで行きたいと思っております。2009年が皆様にとって幸せな一年であるようお祈りいたします。

医療安全推進週間
「わかるまで　聞こう　話そう　伝えよう」

― 医療安全推進研修会を実施 ―

安全管理部 副部長　高 橋 秀 史

平成13年に厚生労働省が定めた医療安全推進週間（平成20年度11月23日～ 29日）は医療安全を願う行事として定着してきた。今年のテーマは「わかるまで　聞こう　話そう　伝えよう」で、東京では公開シンポジウム「患者・市民の医療参加とパートナーシップ」（医療の質・安全学会共催）が開催された。安全な医療は医療者と患者の共通の願いであり、協同作業で実践しよう、ということだ。

今回、当院でも増田部長による「インスリンのヒヤリ・ハっと」の講演に続いて、社会保険相模野病院院長　内野直樹先生による「真実説明の実際」という特別講演が実施された。今年、全社連で発行した「医療有害事象・対応指針」にある真実説明について、「うちではとっくにやってます」と言う内野院長の、熱意あふれる講演で、嘘はつかない、真実のみを誠実に説明することの重要性が語られた。それは決して訴訟対策ではなく、患者と医療者に信頼関係の構築することだけを目指すことだった。当初、抵抗のあった職員にも徐々に浸透し、真実を語る職員を徹底して守ることが伝わった結果、隠し事のない病院として職場環境もよくなったという。アンケートの結果、「ミスを話すのは辛かった」というのが過半数である一方、「真実説明は実行できている」という回答がほぼ全員であり、内野院長曰く「うれしい結果」だったという。

このように内野院長のリーダーシップの元、全職員が一丸となって同じ方向を向いた結果、病院運営も向上し、黒字化に成功し、機能評価やISO9001（品質管理）も取得するに至ったという。

その後の内野院長の話だが、数年前に電子カルテを導入した当時、その電子カルテは、その日の内に起きたことはカルテに記録を残さずに書き直すことが可能で、驚いた院長は、100万円を支払って、改竄防止に全ての記録を残すオプションをつけたという。その後、患者とトラブルになったときにカルテ改竄が出来ないことを目前で示して納得して頂いて、「元は取った」と語られていた。場合によっては、自分のミスを認めて真実を説明するというのは簡単なことではないと思う。しかし、敢然と真実説明を実践することによって、初めて安全と信頼の医療という医療者と患者の共通の目標へ向かうことが出来るというメッセージが伝わる医療安全研修会となった。

医療の現場から①

遺伝性非ポリポーシス大腸癌(HNPCC)について

外科　大沢昌平

遺伝性非ポリポーシス大腸癌（HNPCC）は、家族性大腸ポリポーシス（FAP）とは別に、消化管ポリポーシスを伴わないで、遺伝性、家族集簇性に認められる大腸癌です。

以前は癌家系症候群と呼ばれていましたが、1990年のアムステルダムの国際会議でHNPCCあるいはLynch 症候群に統一され、その後DNAのミスマッチ修復（MMR）遺伝子の異常によることが明かとなり、1999年に一部の診断基準が改訂され、現在広く使用されています。

診断基準の概要は、3名以上の血縁者がHNPCC関連癌（大腸癌、子宮内膜癌、小腸癌、腎盂・尿膜癌）に罹患し、かつ罹患者の1名は他の2名の第1度近親者、2世代以上にわたり、罹患者の1名は50歳未満で診断され、FAPが除外されるとされています。常染色体優性遺伝であり、性別に関係なく2分の1の確率で遺伝し、現時点で5種類の原因遺伝子が同定されています。浸透率（大腸癌に罹患する頻度）は80～90%ですが、上記のHNPCC関連癌の他、胃癌、卵巣癌、膵臓癌の発生も指摘されており、大腸癌に特定されないため、遺伝性非ポリポーシス大腸癌という呼び名が不適切との意見もあります。

全大腸癌に占める割合は欧米では1～5%とされていますが、我が国では臨床的に経験することはこの頻度よりはるかに少ない印象で、実際大腸癌研究会での全国アンケート調査では0.2%程度でした。現在大腸癌研究会に委員会が設置され、遺伝性大腸癌の早期発見・早期治療の研究が進められており、意識をもって調べれば2%位の頻度になるだろうとのことです。

HNPCC保因者に対するサーベイランスとして、20歳代から大腸内視鏡検査と女性なら30歳代から子宮癌検診などがあげられています。実際私が経験した最初の症例は24歳の下行結腸癌の症例で、母は34歳時子宮癌、37歳時横行結腸癌に罹患しておりました。治療として予防的に大腸全摘あるいは子宮付属器切除は日本ではオプション的でまだ一般的ではありません。今後内科外科以外の科の先生にも知って頂き、症例蓄積による研究が必要な疾患であると思われます。

医療の現場から②

糖尿病と予防的フットケア

内科・糖尿病　越谷　剛

近年、糖尿病の領域で注目されている病態に、「糖尿病足病変」があります。

糖尿病足病変は、足趾の神経障害、血流障害、感染防御能の低下を基礎病態とし、靴擦れ、外傷、不適切な爪の処置、火傷などにより引き起こされる多様な病変をいいます。足趾変形、胼胝・鶏眼の形成にはじまり、進行すると潰瘍、壊疽、下肢切断に至る例も見受けられます。

また糖尿病患者さんは、足趾の感覚低下、視力障害を合併していることが多く、足病変の発見も遅れがちとなるため、進展防止のためには「予防」の観点をもって取り組む必要があります。

2008年の診療報酬改訂において「糖尿病合併症管理料」が新設され、特に「糖尿病足病変」の管理に重点が置かれています。当科外来においても、この夏より、外来看護師を中心としてフットケアを開始し、足病変、足外観異常の早期発見に努めております。

足白癬、胼胝、鶏眼などの外観異常は多数の患者さんで見られており、「日本における糖尿病患者の足外観異常と糖尿病神経障害の実態に関する報告」（2008年3月）によると、何らかの足外観異常を認めた症例は58.0%であり、足外観異常のある例では糖尿病神経障害を認める例が高頻度であったと報告されています。

糖尿病足病変はきちんと管理することで発症・進展を予防できるものであり、糖尿病患者さんを診たら、是非足に注目していただきたいと思います。

医療の現場から③

変形性膝関節症ってどんな病気？

整形外科 医長　目 良 浩 一

変形性膝関節症とは、膝関節の軟骨がすり減り、関節炎や変形を生じて痛みが起こる病気です。正常の膝関節では関節の表面は軟骨で覆われています。軟骨は弾力性に富んでいて、衝撃を和らげたり、動きを滑らかにしたりしています。また関節包（関節を包む袋）の内側には滑膜があり、滑膜から分泌される関節液は軟骨の成分の１つであるヒアルロン酸を含んだ粘りのある液体で、膝関節がスムースに動く潤滑油と軟骨の栄養の役割をしています。

変形性膝関節症は年齢とともに増加します。一般の方を対象にした疫学調査では、60歳以上で女性の約40%、男性で約20%の人がレントゲン上、変形性膝関節症と診断されます。さらにこの割合は80歳代では女性で60%以上、男性でも50%近くに達します。

そして、レントゲン上で変形性膝関節症の所見がある人のうち約20%に膝の痛みや腫れなどの自覚症状がみられるとされています。またどの年代でも女性の割合が男性に比べて1.5～2倍多いという特徴があります。

初期の変形性膝関節症では、軽度の関節軟骨の摩耗が生じますが自覚症状はほとんどありません。しかし軟骨の摩耗がさらに進行すると、膝の曲げ伸ばしや立ち上がりの動作、階段の下りなどの時に痛みを感じるようになります。この時期になると、いわゆる「膝に水がたまる」状態（＝関節水腫）を起こす人もいます。そして進行期～末期の変形性膝関節症では、軟骨の摩耗がさらに進行して関節の土台の骨（＝軟骨下骨；なんこつかこつ）が露出したり、骨棘（こつきょく）といった骨そのものの変形が生じます。この状態では動作時に硬い骨どうしが直接ぶつかり合うために強い痛みを生じ、曲げ伸ばしの角度の制限も高度となります。そのために日常生活に大きな障害がおこってしまいます。

整形外科の外来には、変形性膝関節症をわずらっている患者さんが非常に多く来院されます。病院での治療法には、大きく分けて保存療法と手術療法の２つがあります。

保存療法にはリハビリテーション、装具療法、薬物療法があり、これらを組み合わせて行われます。手術療法は、保存療法で効果が得られない場合に選択されますが、この数は決して多くはありません。変形性膝関節症は、加齢による関節の変化が主因なので、関節の機能を維持しようとする患者さん自身の気持ちとがんばりがとても大切です。

●部門紹介●　ＭＥ部

ＭＥ部　斉 藤　徳

こんにちは、札幌社会保険総合病院ＭＥ部です。

「ME」部とは、Medical Engineeringの略で「臨床工学」を意味し、病院内に配置されている生命維持管理装置や全ての医療機器の管理や修理を行うスペシャリストチームです。

ＭＥ部は、部長（副院長）のもと、臨床工学技士（CE）６名と視能訓練士（ORT）２名で活動しています。

臨床工学技士は、年々高度化する医療機器に対し、正しい知識と専門的技術を身につけ管理操作する職種として誕生しました。

私たち臨床工学技士の業務は、手術室で使用する高度な医療機器や呼吸の代わりとなる人工呼吸器、血液透析装置などの操作、管理を行っています。

また、医療機器を中央管理することで常に機器を安全に使用できる状態に保ち、最小限の数で効率よく活用できるよう努めています。

視能訓練士は、眼科で医師の指示のもと視力検査や視野検査といった検査を行うとともに、斜視や弱視の訓練治療にも携わる医療技術職です。眼科におけるスペシャリストとして、患者様の眼の健康を考え日々検査を行っています。

今後も、患者様に安全な医療機器や検査を提供できるよう部員一丸で努力していきます。

こんにちは、医療連携室です　No.8

あけましておめでとうございます。

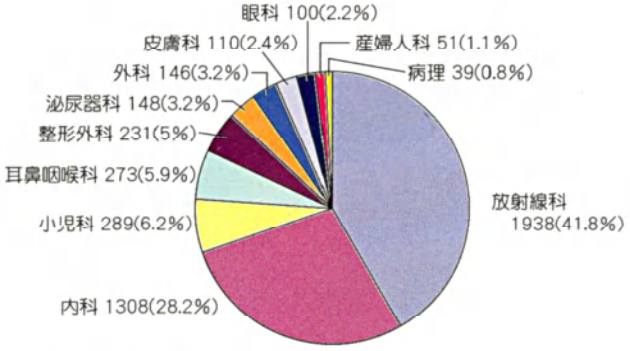
昨年も、多くのご依頼を頂き心よりお礼申し上げます。本年も皆様とともに、より充実した地域医療を目指し業務を行っていきたいと存じます。何卒よろしくお願い致します。

さて、今回は平成19年度の「医療連携室」統計資料が完成しましたので、一部ですがご報告させていただきます。

平成19年度は、4,633名の患者様が医療連携室を通じ受診や検査で来院されました。

《診療科別》

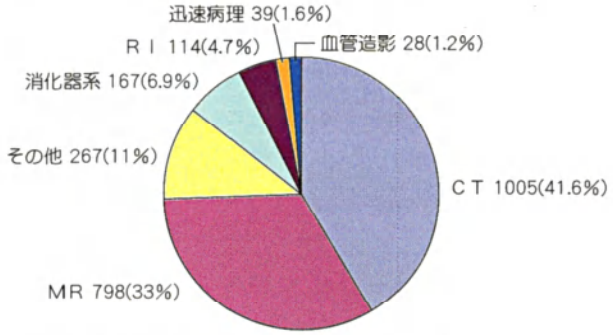
放射線科が診療予約全体の41.8%を占め、次いで内科が28.2%、小児科が6.2%を占めています。



《検査項目別》

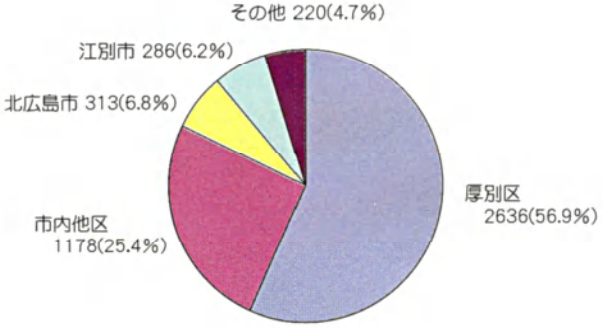
検査目的での利用は2,241名です。

（同一人物の複数検査があるため総検査数は2,418件）



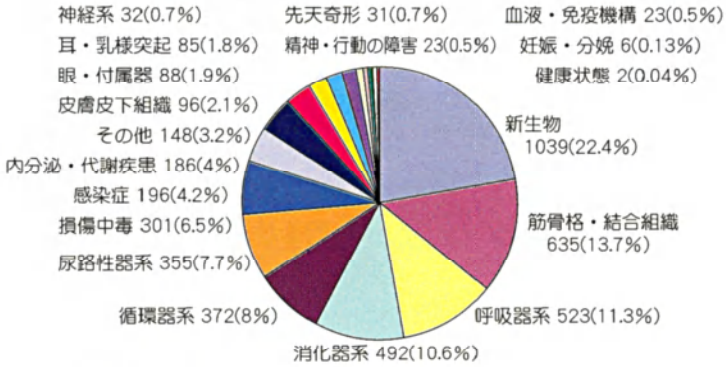
《地域別医療機関利用状況》

年間で323医療機関から利用がありました。そのうち厚別区の医療機関が2,636件（56.9%）を占めています。



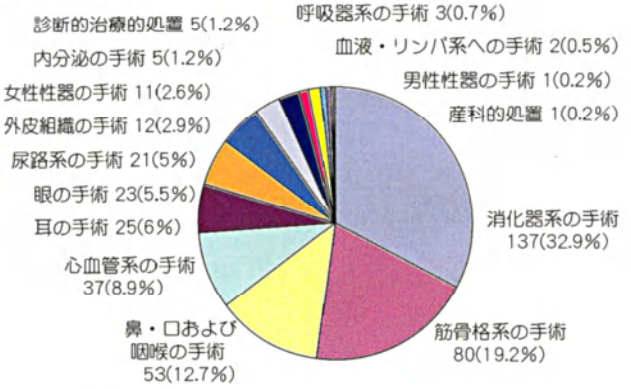
《受診患者様の疾病分類（ICD－10分類）》

受診患者様全体を疾病別に分類すると、19分類でした。新生物22.4%、次いで筋骨格系13.7%、呼吸器系が11.3%でした。



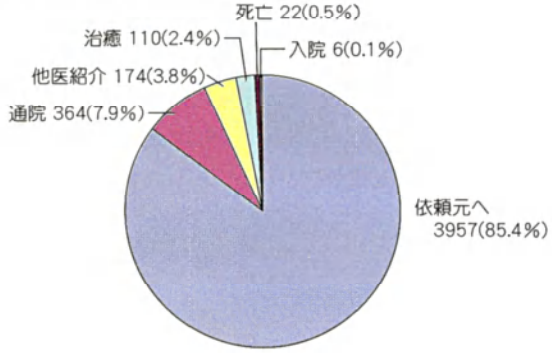
《手術（ICD－9分類）》

治療を要した1,749名のうち、手術を受けた方は416名でした。



《患者様の受診後6ヶ月の動向》

受診後6ヶ月を経過した時点で85.4%が依頼元医療機関に戻っています。



＊ 行事予定 ＊

糖尿病教室（全2回実施）平成21年2月19日・2月24日　11時～　当院2階講義室（事前申し込みが必要です）

院内図書コーナー「北辰文庫」

北辰文庫 文庫長　篠 原 澄 子

念願でありました患者さん向けの図書コーナーが10月16日にオープンしました！オープン日の朝には図書コーナーに関係者の皆さんにお集まりいただきました。

まず大西副院長から北辰文庫開設のお話をいただき次に院長先生による除幕式が行われ記念すべき日となりました。

この日を迎えられたのも職員の皆さんがとても積極的に書籍を寄贈していただいたおかげです。おかげさまで約800冊もの書籍が集まりました。この紙面をお借りして改めて感謝申し上げます。「ご協力本当にありがとうございました」。

さて、少し「北辰文庫」について紹介させていただきます。利用時間は月曜から金曜までの朝８時30分から夕方の５時までです。

書籍のジャンルは歴史小説、推理小説、私小説、ノンフィクション、漫画、雑誌などなどの一般書と病気のことに関する専門書があります。貸出は総合案内の方々にご協力をいただいて貸出簿と返却箱を置かせてもらっています。

オープンしてまだ一か月ですが多くの患者さんが利用してくださっている様子をうかがい、もっと充実した「北辰文庫」をつくっていけるよう頑張りたいと思っています。

これからアンケート調査などを実施し患者さんに満足してもえらえるよう努力していきますので、今後とも皆様のご協力ご指導をお願いいたします。

第10回調理技術勉強会が開催されました

栄養部 調理師　高 橋 晃 司

平成20年10月22日（水）に当院「はまなす」において第10回調理技術勉強会が開催されました。

今回のテーマは「喜ばれる食事～パンに合う献立」と題して行われました。調理師と栄養士で6組のペアを組み、日頃の調理技術の腕を競い合いました。この会も10回目（年1回開催）を数え好評をいただいていますが、今回はこれまでよりも1時間ほど早い18時30分を開始時間としたため、大勢の職員の方々に参加していただきました。

6組の料理以外に橋本係長が担当して調理した、ドイツラショナル製コンビオーブンで焼き上げたパン9種類と、焼きそば、ミートローフ、かぼちゃのグラタンなどの料理もあり大変豪華な会となりました。

テーマがパンに合う献立であるのと、季節も秋という事で主菜に鮭を使った料理が多く、6組中5組が鮭料理でした。審査員の方々は、「味付け」、「色彩・盛り付け」、「病院食適応性」について審査しながら真剣に試食をしていました。

たんぱく質や塩分などの制限があるなかで、それぞれが味付けに甘味、酸味などを補うなどの工夫のあとが随所に見られており、審査員のみならず、大勢の参加者からも「おいしい」「きれい」「安い」などしきりに感心する声が聞かれ、また「次回も楽しみ」との声も…。

今回最優秀賞をいただいたのは、私、調理師高橋と栄養士吉村ペアの「秋味ランチ」でした。鮭のレモンしょうゆ焼き、味に工夫した変わりソースがけのサラダ、秋の味覚きのこをふんだんに使ったスープの献立が選ばれました。

点数は各組、接戦で甲乙つけがたい出来栄えであり、調理師、栄養士の意気込みが伝わったのだと思います。この献立は11月23日（日）の昼食に病院食として患者さまに提供されました。

● 最優秀賞「秋味ランチ」●

クリスマスの夕べに参加して

透析部　佐々木　恵

「皆さんこんばんは。メリークリスマス!!」という言葉と共に当院1階、エントランスホールで第4回クリスマスの夕べが開催されました。

当日は50名を超える方が参加して下さり、椅子を追加するほどの盛況ぶりでした。

木村有加子さん、樋口千夏さんのバイオリンとピアノの演奏では、「川の流れのように」や「戦場のメリークリスマス」など会場に来られた方が知っている歌を中心に演奏して下さり、しっとりと聞き入っている方が多くいらっしゃいました。

伊藤有里子さん、木原秀憲さんの歌とピアノ演奏では、ラテンミュージックから始まり、「ハナミズキ」や「サンタが街にやってきた」など大人から子供まで幅広く楽しめるような曲目になっており、手拍子をしながら皆さん楽しんでいました。

最後はサンタさんが登場し、子供や来られた方に直接クリスマスプレゼントを手渡し終了となりました。

クリスマスの夕べを見に来られた方や、患者さまも終始笑顔で過ごされとても楽しい時間を過ごすことが出来ました。

お知らせ

第62回 札幌社会保険総合病院
開院記念行事

第10回
市民公開フォーラム

◆日　時　平成21年1月30日(金) 17時～

◆場　所　当院1階 エントランスホール

編集後記

地球温暖化のせいで今年も雪のない師走かと思いきや雪はシンシンと降ってきましたね。でもつもるのかな～と舞い落ちる雪を見ながら物思いにふけっています。

ホワイトイルミネーションには雪がお似合いですよね。色とりどりのイルミネーションを眺めていると心が癒されます。

2008年は総理の辞任に次ぐ辞任でありましたが洞爺湖でのサッミットが今後生かされることを期待して牛のようにのんびり見えてかなりのしたたかさを武器に次年度は何かにチャレンジしてみよう！（島宮記）

編集委員　相川・小林・唐・島宮・紺野・和島・新谷・北村・土田・重本・佐藤

発行責任者：秦 温信
発行：〒004-8618 札幌市厚別区厚別中央2条6丁目2番1号　札幌社会保険総合病院